

各道府縣別検査成績表 (最近三ヶ年平均)

道府縣別	都		府		道府縣別	都		府	
	検査人員	患者数	百分比例	検査人員		患者数	百分比例	検査人員	患者数
北海道	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
東北道	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
関東	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
北陸	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
東海	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
近畿	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
中国	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
四国	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
九州	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0
平均	4,044	1,133	28.0	1,045	296	28.3	4,044	1,133	28.0

各道府縣別壯丁「トラホーム」検診成績表（最近三ヶ年平均）

道府縣別	都			道府縣別			都		
	検診人員	患者数	百分比例	検診人員	患者数	百分比例	検診人員	患者数	百分比例
北海道	六〇四	〇九	一・三六	一、四〇〇	三六	一・六六	三、三三	七六	二・二二
東京都	九、二〇〇	四六	五・五五	三、四〇〇	三九	一・一三	一、〇〇〇	五	〇・五
大阪府	七、四〇〇	四三	五・七	一、〇五〇	六	〇・五七	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
神奈川県	六、九〇〇	三三	四・八	八〇〇	三	〇・三七	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
長崎県	六、九〇〇	三三	四・八	八〇〇	三	〇・三七	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
新潟県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
群馬県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
茨城県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
栃木県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
埼玉県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
愛知県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
三重県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
滋賀県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
岐阜県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
長野県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
静岡県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
山梨県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
福島県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
岩手県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
合 計	一、四〇〇	三六	二・五七	一、四〇〇	三六	二・五七	一、四〇〇	三六	二・五七

各道府縣別其の他の「トラホーム」検診成績表（最近三ヶ年平均）

道府縣別	都			道府縣別			都		
	検診人員	患者数	百分比例	検診人員	患者数	百分比例	検診人員	患者数	百分比例
北海道	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
東京都	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
大阪府	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
神奈川県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
長崎県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
新潟県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
群馬県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
茨城県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
栃木県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
埼玉県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
愛知県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
三重県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
滋賀県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
岐阜県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
長野県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
静岡県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
山梨県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
福島県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
岩手県	三、三〇〇	一六	四・八	一、〇〇〇	三	〇・三	一、〇〇〇	一〇	一・〇〇
合 計	一、四〇〇	三六	二・五七	一、四〇〇	三六	二・五七	一、四〇〇	三六	二・五七

二、快晴日数

快晴日数少なき、即曇雲の天候地帯に本病多きにあらずや、とは往々人の想像する處、然るに關東、東山、東海及九州の各區は、何れも快晴日数四〇以上に於て、之れを少なき地方に比すれば、殆んど倍に近き數を示せるが、而も其「トラホーム」患者率に至つては、必ずしも少なからず。即最高快晴日數を表せる東海區は、全國平均に比し僅かに低率にして、東山區は最低率の部に屬するも、九州區は之れに反し最高の部に居る。一方快晴日數最も少なき地方に於ても、或は少く、或は多き等一定せず、即北陸區は全國中最低罹病率の地方に屬するに反し、東北區は同一氣温を示せるに係らず、最高率を表せる等、之れ又前記氣温と同様本病消長に何等關係なき數的證左なり。次に

三、降水

を見るに、全國中降水量多きは北海道、北陸區及沖繩なるが、右の内北陸は最低、沖繩は比較的高率を示し、一方等しく降水量最も少なき東海、東山及中國區の中に在りても、東山區は極めて罹病率少なきに反し、東海、中國區は遙かに高率にして、之れ等に次いで降水量少なき九州區は、全國中「トラホーム」多き方に屬する等、降水量の多寡も亦本病の消長に關係を有せざるを物語るものなり。

四、雪

積雪地方に眼病患者多きは古くより稱せらるゝ處、嘗て一八一三年プロイセン軍隊内に本病の汎濫的發生ありし當時「Blindheit」は同軍隊内傳染性眼炎の總てが「トラホーム」なるにあらずして、寧ろ雪に依る盲者並に凍傷性眼病多かりし旨を述べ、ローゼナウの著豫防醫學と傳染病中にも雪盲(Snow Blindness)を記載し、其原因を紫外線の過多に歸し居れり。「トラホーム」の助成原因として、如何なる程度に雪を評價し得るやに就き記載あるを知らざれども、既に右の如く結膜を刺戟し、炎症を起し、甚しきは盲に迄陥れ得るものとせば、何等かの助成因子たらざるなきか。此の間の疑問を解決せんが爲め本縣に於ても殆んど半歳間雪中生活を爲すの餘儀なき地方と、積雪極めて少なき地方とに就き本病の多寡を調査比較したる結果は次の如く、雪少なき地方却つて罹病高率なるの結果を得たり。更に個々の町村に就て見るに、雪多き地方にて三〇%以上の高率を示す地方ある一方、雪最も少なき町村にて四%内外なるありて一致せず。又壯丁検査成績を基礎として郡市別に見るも同様にして、結局雪と「トラホーム」との間に何等據るべき數字的根據を發見せず。尙此れを前記氣温との關係條下に掲げたる全國各地の罹病率分配狀況に徴するも亦全く同様の結果なり。

雪と「トラホーム」の關係

(昭和二年新潟縣)

町村名	五ヶ月間以上雪中生活町村		町村名	積雪期間短方	
	検査人員	患者		検査人員	患者

北谷村	二、六五六	一七二	石山形村	三、七七八	四七五
富谷村	一、八七〇	二二一	大形村	三、一四八	五二七
石津村	一、〇六四	一七四	鳥上村	一、七一五	三六九
十日村	一、四三八	一五九	西納村	九一四	四三
上杉村	三、三二九	一、〇六六	出雲崎町	六、六七五	九〇〇
赤谷村	一、八一七	二四	内野村	四、九六七	九八四
太田村	三、五二二	三二	浦濱村	六六六	二八
高柳村	七、五七八	七四二	龜代村	二、一〇六	五〇二
川口村	二、〇〇六	一七二	内郷村	二、三一一	一九二
中條村	二、一〇七	三八〇	西通村	二、四八九	二八六
千手村	二、〇三八	二〇四	黒埼村	六、一一一	一、一〇九
松下村	三、五六〇	三二一	鏗郷村	二、〇九九	三〇〇
松之山村	三、二八七	七二七	白根町	六、一一六	七六六
奴奈川村	二、〇一六	一六九	小林村	二、〇一二	二六一
山平村	二、九〇四	二五一	濁川村	二、〇九五	三一四
片貝村	四、一二四	二八二	岡方村	三、四九九	四三八
計	四五、三二六	一、〇七九	計	五〇、七〇一	七、四九四

雪と「トラホーム」表

(壯丁「トラホーム」検査成績に依る最近五年間平均)

(新潟縣)

郡市別	雪多キ地方		郡市別	雪少ナキ地方	
	町村数	%		町村数	%
北魚沼郡	一一	六・三二	中蒲原郡	二二	七・九三
中魚沼郡	一三	四・一一	西蒲原郡	一〇	一・六六
南魚沼郡	九	七・一五	北蒲原郡	二〇	一〇・九八
刈羽郡	二	七・三八	南蒲原郡	八	七・八二
中頸城郡	二二	四・七七	計	八	七・八二

郡市別	雪多キ地方		郡市別	雪少ナキ地方	
	町村数	%		町村数	%
東 頸 城 郡	一四	六・五四			
西 頸 城 郡	九	五・七六			
古 志 郡	一〇	一一・五〇			
平 均	九〇	六・六九	平 均	六〇	
				九・六〇	

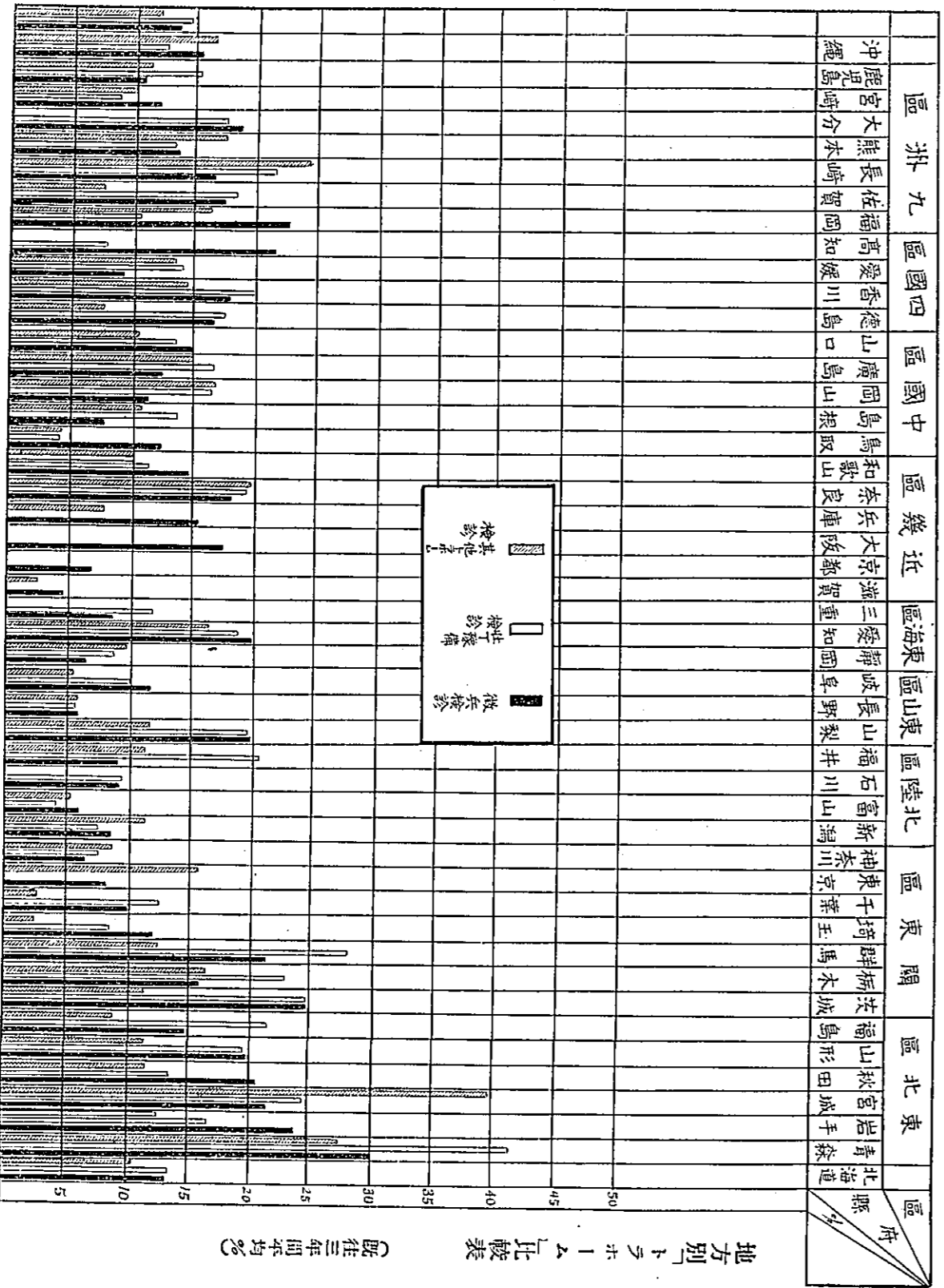
五、海 氣

パウルの(KI. W. No. 50)、中部歐洲光線療法地に就ての研究、成績中、海岸の光量には普通光線の外海面よりの反射光線加はる旨を述べ居れり。海面反射に依り光量を増すとせば、同時に紫外線も増量すべく、果して然りとせば前段雪の場合と同様の關係並紅外線による眼障害(瞳孔括約筋刺戟、痙攣、レンズの濁濁、虹彩の變色等「コーンツ」)等を惹起し、同時に「トラホーム」の消長にも何時かの關係を有するものにあらざるかは何人も想像し得る處、然るに本縣に於て調査の結果は地理的分布の部及盲者と「トラホーム」の地理的關係、其他既述の通り概括的に觀察すれば一般に海岸に本病多きこと歴然たるも如何にせん海岸にても高率なるあり、一方亦極めて低率なるありて全く一貫せず例へば

一般住民検診成績		壯丁検診成績	
多 多 方	八千浦村	八千浦村	一三・〇〇
多 多 方	八千浦村	八千浦村	一五・七九
多 多 方	八千浦村	八千浦村	一二・二四
多 多 方	八千浦村	八千浦村	一・八四
多 多 方	八千浦村	八千浦村	一・四五
多 多 方	八千浦村	八千浦村	一・二九
少 少 方	島田村	島田村	八・〇三

の如し。

若し夫れ「トラホーム」の多きを以て海氣の罪とせんか、何れの海岸地方も其被むる影響たるや一視平等なるべく、従つて至る處本病多かるべきに必ずしも、然らざるは海氣と本病蔓延との原因的關係稀薄なる證左にして、之れを要するに本縣に於ける調査成績より見れば氣象と「トラホーム」との間に何等密接なる關係なきものと云ふを得べし。



第三節 人種と「トラホーム」

人種の差異が「トラホーム」の發生及蔓延に影響ありや否やの問題は種々なる方面より研究せられ、殊に黒人、「スカンデナヴィヤ」人及「ユダヤ」人等に關する報告多し。

Charet は佛、白耳義の二〇〇「メートル」以上の土地に於ける住民の人種を精査し、「ケルト」人種に本病最も少なきを見て、「トラホーム」毒素は「ケルト」人種に對しては微弱にして且つ本症は「ケルト」人種を侵せば其毒力を失ふものなりとせり。然れども其後イレン (Iren) の如き純「ケルト」人よりなる地方に於ても多數の「トラホーム」患者を見たるにより、「ケルト」人種も亦本病に侵さるゝことを承認せり。

Svan Burnett は一八七六年ニューヨーク萬國眼科學會にて黒人の「トラホーム」免疫なることを報告し其後又黒人六〇〇〇人の眼患者を檢査し、同じく黒人は「トラホーム」免疫なることを主張せり、尙同氏は一八九七年合衆國の十三ヶ所の各地方の報告を集積して、黒人は衛生的見地より最も不良なる生活をなし居るに拘はらず「トラホーム」に罹患するものなく免疫なることを報告す。

Washington は其の住民の三分の一は、黒人なるも十五年間一〇、〇〇〇人の眼患者中僅かに六人の「トラホーム」黒人を見るに過ぎず。

White は黒人の大集團地に於て一、〇〇〇人の眼患者中一人の「トラホーム」を發見せるのみ。

Savage は三分の一黒人の居住せる地に一人の「トラホーム」をも發見せざりしと報告す。

Yazn は一八九九年キューバに於ける「トラホーム」の人種的分配を左の如く發表せり。

黒人一、白人四、支那人七の割合なり。

Burns, Lueten, Howe, Hinkley, v. Mithgen 等も一八九六年に黒人に「トラホーム」少なきことを報告す。

然るにアメリカの「トラホーム」は殆んど黒人を襲ひ、白人は極めて少なく、一九二二年ケンタツキ州學校兒童一八、〇一六人中「トラホーム」患者一、二八〇人 (Prizing) (七%)、オスト、ケンタツキに於ては二・五% (Mc Mourin) の「トラホーム」あり、其の大部分黒人なること申す迄もなく、更に最近ミネソタ州に於て徹底的に調査されたる處によれば (T. Clark)

	白人	黒人
一九二二—一九二三年	〇・五一%	一五・三四%
一九二二年	〇・三〇%	六・〇〇%

の狀況にして此の數字は最も有力に黒人も亦「トラホーム」に罹ること多きを物語り居れり。尙 Mithgen の一八九〇年コンスタンチノー

ブルに於て五、〇〇〇人以上を檢査し其際一、〇九二人の本患者中黒人はギリシヤ人に次ぎ最高罹病率を表はせる報告、並に同氏がエジプトに於ける調査にも黒人は六〇%の罹病率を示すこと、其他の *Wong* はアレキサンドリヤ及カイロに於て、Gover 及 Gama Pinto は南米に於て研究し、南米の黒人は亞弗利加西海岸の黒人の如く「トラホーム」に罹ること多しと發表せる等、何れも皆黒人に本病多きを立證する事實たらざるはなし。

Ole Bril は一八九六年南米のスカンデナヴィア人は「トラホーム」によく感染するも、ノールウエーのスカンデナヴィア人には「トラホーム」なしと云ふ。

Foucher は一八九七年カナダのモントリオールに於て一三、八六五人の眼患者中四四九人の「トラホーム」即三六%を發見し、而して此檢査に際し「エスキモー」人及カナダの印度人は全く「トラホーム」に對し(結核に對すると同様)免疫なることを唱へ會て Burnett の報告に反對せり。

一八九〇年 Mithgen コンスタンチノーブルに於て五、九一七人の眼患者中一、〇九二人の「トラホーム」即ち一八三%を發見し、之を人種別に分ち次の如く發表せり。

人種	眼病患者數	同上に對する「トラホーム」
「トルコ」人	一、二九〇	一・〇%
「ギリシヤ」人	一、四〇八	二五・〇%
「アルメニヤ」人	一、〇八八	一九・〇%
「ユダヤ」人	四三七	一〇〇%
黒人	二四	二〇〇%
外國人	一、六七〇	七・〇%

同氏はブルガリヤに於て「ブルガリヤ」人と他國人との「トラホーム」を比較し。

人種	「トラホーム」
「ブルガリヤ」人	四四・〇%
「ルーマニヤ」人	六八・〇%
「ギリシヤ」人	四五・〇%
「トルコ」人	六〇・〇%

同氏は又一九〇三年エジプトに於ける「トラホーム」の人種別を調査し次の如く發表せり。

人種
 「モハメツト」教徒 八六%
 「コプト」族 八五%
 「エダヤ」族 九二%
 黒人 六〇%
 「トラホーム」

Canineau はルーマニヤの「Jassy」に於て「ユダヤ」人に最も多く眼患者二、一七六人中一、三九人の「トラホーム」患者にして五二〇%なりと報告す。
 Gunning は一八八五—一八九五年に亘り研究しアムテルダムに於ける「ユダヤ」人には數々「トラホーム」に遭遇するもロツテルダムに於けるものには稀れなりと云へり。
 Bayer は一八九五年「イスライル」人は「トラホーム」に侵さるゝ素因多しとせり。
 更に黒人以外の他の各人種を表示すれば次の如し。

人種と罹病状況表

人種	患者	率	報告者	備考
スカンヤナビヤ人	(南米)	多シ	オーレブル	
同	(ノールウェー)	少シ	ヒルシュベルグ	
印度	(カナダ)	高率	フエーヘル	
同	(カナダ)	免疫	ヘルシュベルグ	
同	(同)	同	同	
同	(コンスタンチノープル)	一〇%	ミルリゲン	
同	(アルガリア)	六〇%	同	
同	(ガリヤ)	多數	フオイヤ	
同	(ハンガリー)	ナシ	ミルリゲン	
同	(コンスタンチノープル)	一〇%	ミルリゲン	
同	(エジプト)	九二%	同	
同	(アムテルダム)	多數	同	

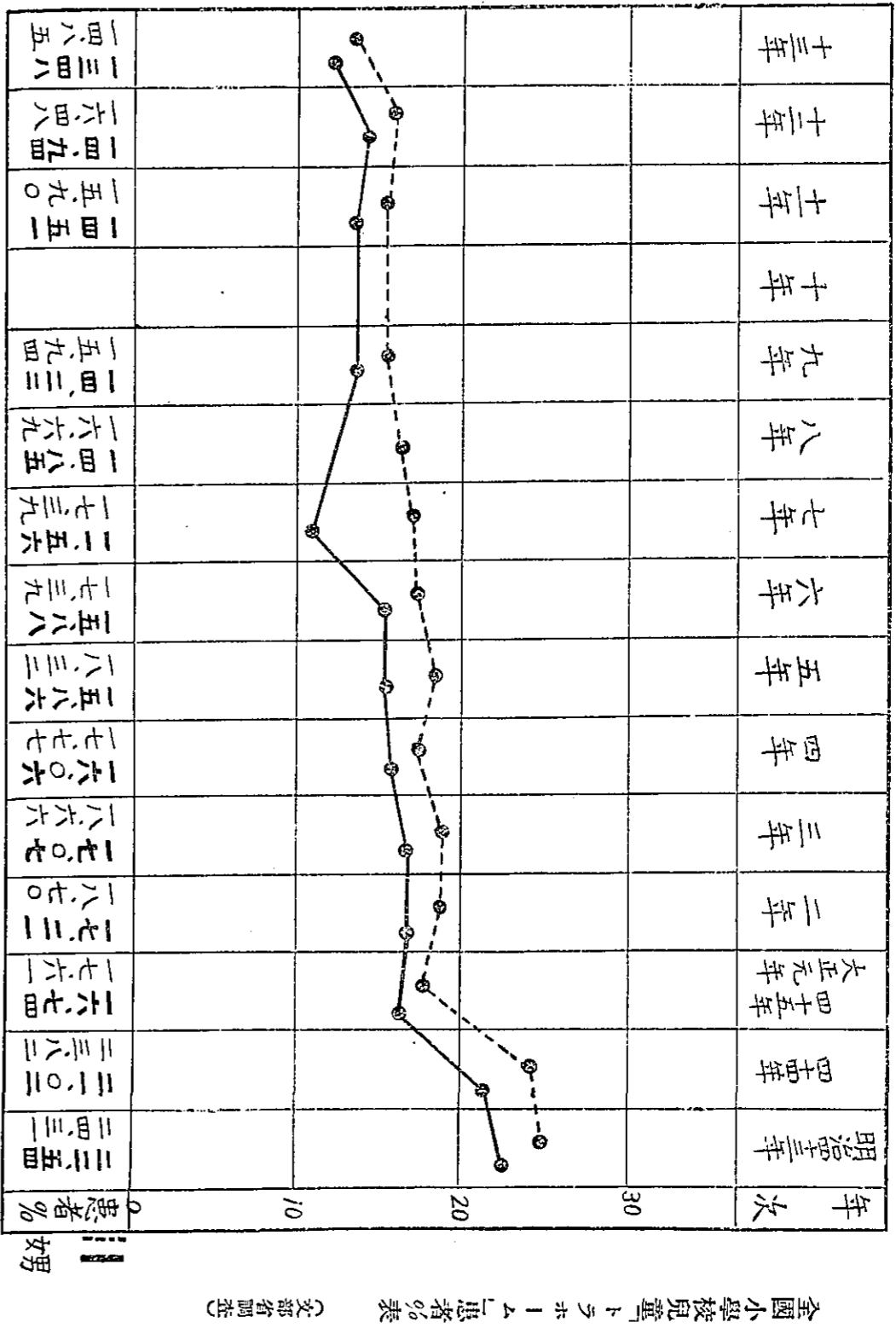
人種	患者	率	報告者	備考
同	(ロツテルダム)	同	同	
同	(コンスタンチノープル)	二五%	ミルリゲン	
同	(アルガリア)	四五%	同	
同	(コンスタンチノープル)	一九%	同	
同	(アルガリア)	四四%	同	
同	(アルガリア)	六八%	同	
同	(エジプト)	八六%	同	
同	(同)	八五%	同	
同	素因アリ	同	同	
同	同	同	同	

第四節 男女と「トラホーム」

以上諸家の報告を綜合するに、同一人種と雖も其環境の如何に依り自ら罹病率に著しく影響を來すものにして、フオイヤが嘗て「トラホーム」は國民性及人種に關係なし、感染の機會を得ば何れも感染す云々と云へる言の最も信するに足るべきを思ふ。
 男女と「トラホーム」の文獻を見るに「Th. Gurnham」はパレスチナ及シリア地方に於ける「トラホーム」を檢して女に本病多きを報告し、ボンに於ける二三〇〇人の検査の結果にては男一四六對女一一五四にして女稍多く、高橋は京大にて男二一五對女一六三〇なる旨を報じ、桑原は男に多しとなし、パヴリアも男多き旨を報告せり。之れに反し脇坂は本邦「トラホーム」を推算して女多き旨を述べ居れり。
 以上を通覽するに大體に於ては女多數説多きが如きも、要するに從來各地方より出でたる報告は多く病院患者を基礎とし若くは小數の材料より觀察したる結果、右様の齟齬を來すものなるべく、此の點に於て全國各府縣住民に對し施行したる以下記述の各種検査結果程最も強力なる斷材を與ふるものはあらざるべし。

第一 小學兒童

先づ文部省統計に就き學校兒童「トラホーム」検査成績より觀察せんか



前表に依れば「トラホーム」の女子に多く男子の少なきこと説明の要なく。更に本縣の状況を見るも

既往(大正十五年)三年平均學童「トラホーム」患者

新潟縣

計	検査人員		患者数	%
	男	女		
計	五五七、七四七	六四、五二六		一一・五七
男	二九六、二八五	三二、五三九		一〇・九八
女	二六一、四六二	三一、九八六		一一・二三

の如くにして此れ又女兒に多きこと一瞥の疑雲なし。

第二各種學校

次に文部省統計に依り、公私立各種學校全部を包括して、其男女何れに本病多きやを観察せんとす。

男女別各種學校「トラホーム」 文部省統計

年	検査人員		患者数	患者%
	男	女		
大正元年	三五九、四三四	二四九、一四六	一四・四四	一五・九四
同二年	九四三、〇七七	七一六、四五四	一五・七九	一七・七八
同三年	一二七九、一二九	一〇〇一、八二〇	一五・八七	一七・九二
同四年	一、三七一、六八二	一、〇三三、八〇五	一四・九二	一七・〇五
同五年	一、三七一、九九九	一、〇八六、〇四八	一四・七二	一七・四一
同六年	一、三九一、三七八	一、一〇二、五五〇	一四・五六	一六・六二
同七年	一、三三二、三二四	一、〇九九、七七八	一四・一九	一六・三〇
同八年	一、四四八、二九七	一、一七七、〇一〇	一三・六七	一五・七九
同九年	一、四二〇、四七八	一、一九三、三六五	一三・一四	一五・一二

備考 以下資料なし

男は 小學校、中學校、師範學校、實業學校、專門學校
女は 小學校、高等女學校、專門學校
即前表も亦餘りに著明に男少女多を現はれ居れり。

第三 新潟縣下一般住民検査成績と男女

最後に縣下各地一般住民検査に當り、同時に本廳員に依り検査を受けたる小學兒童並に一般住民の検査成績より、男女罹病状況を見るに

性別	小 學 兒 童			一 般 住 民		
	検査人員	患者数	%	検査人員	患者数	%
男	四、四二九		一一・〇八	一八、八六七	二九	七・三四
女	三、六八二		一五・〇二	二〇、七二七	四五	二一・八七

の數を示せり。

以上に依つて「トラホーム」が女に多くして男に少なきこと最早や一點の疑惑を挿む餘地なき事實的證左を得たる次第なり。而して何が故に斯く女子に本病多きやに至りては今遽かに斷じ難しと雖も

- (一) 元來本病が一般患者に輕視せらるゝこと及難治なること。
- (二) 結核と共に多く既に幼少の頃より感染し居ること。(年齢別参照)
- (三) 兒女は普通家の中に居り勝ちなる母親即本病を多く有する女性により多く親しむこと。
- (四) 殊に女兒に此の關係あること。
- (五) 婦女子に本病多く且男女共同性と遊ぶこと多きこと。
- (六) 日本家庭の一般的風習として老人が家に在りて兒女の子守に從事すること
- (七) 其老人に陳舊「トラホーム」多きこと。(年齢別並合併症別「トラホーム」等参照)
- (八) 洗面器、手拭等の共用多きこと。
- (九) 而も之れを使用するに當りては日本家庭の通例として女は男より後に使用する風あること。

等を彼是相聯絡せしめて假想するとき自ら女子に本病多き理由も闡明したるやの感なくんばあらず要するに女子は男子に比し感染の機會多き爲なるが如く或は身體の自然性等の關係上所謂素因あるや知り難きも前述の理田及此れに連關する幾多の社會的事情等を考察すれば必ずしも最後の避難所とも云ふべき素因を煩はすに及ばざるが如し。

第五節 年齢と「トラホーム」

「トラホーム」は總ての年齢に來り得れども二〇歳最多く三〇—四〇歳此れに亞ぐ(中村、早野)、少年時代に大蔓延をなすことあり。(Hirschberg, Straub, Ewatzsky, Lawrentjew, Radowitzky, Schiele, etc.) 五—十ヶ月の幼兒最も危險一—二歳は急性、悪急性多し(Schick) 一五歳より二八歳に多し(Adelmann) 二〇歳前後其極に達す(高橋)。青年時代に最多(丸尾)。其他ボンに於ける統計、v. Ottingen Gracfe, Saenisch 等の統計あれども何れも皆大衆に就ての觀察を基礎としたるものにあらずるを以て未だ信を置くに足らず。

大正十三年廣島縣豊田郡忠海町宇二窓に於ける住民「トラホーム」検査成績によれば

年齢	検査人員	患者数	%	検査人員	患者数	%
一〇 歳 迄	四六六	二二三	四七・八五	一四〇	四四	三一・四三
十一歳以上—二十歳迄	四二三	二三四	五五・三二	一二二	四八	三九・三四
二十一歳以上—三十歳迄	一一〇	四〇	三三・三三	一一六	四三	三七・〇七
三十一歳以上—四十歳迄	一三一	三五	二六・七二	一、五一八	六六七	四三・九四
計						

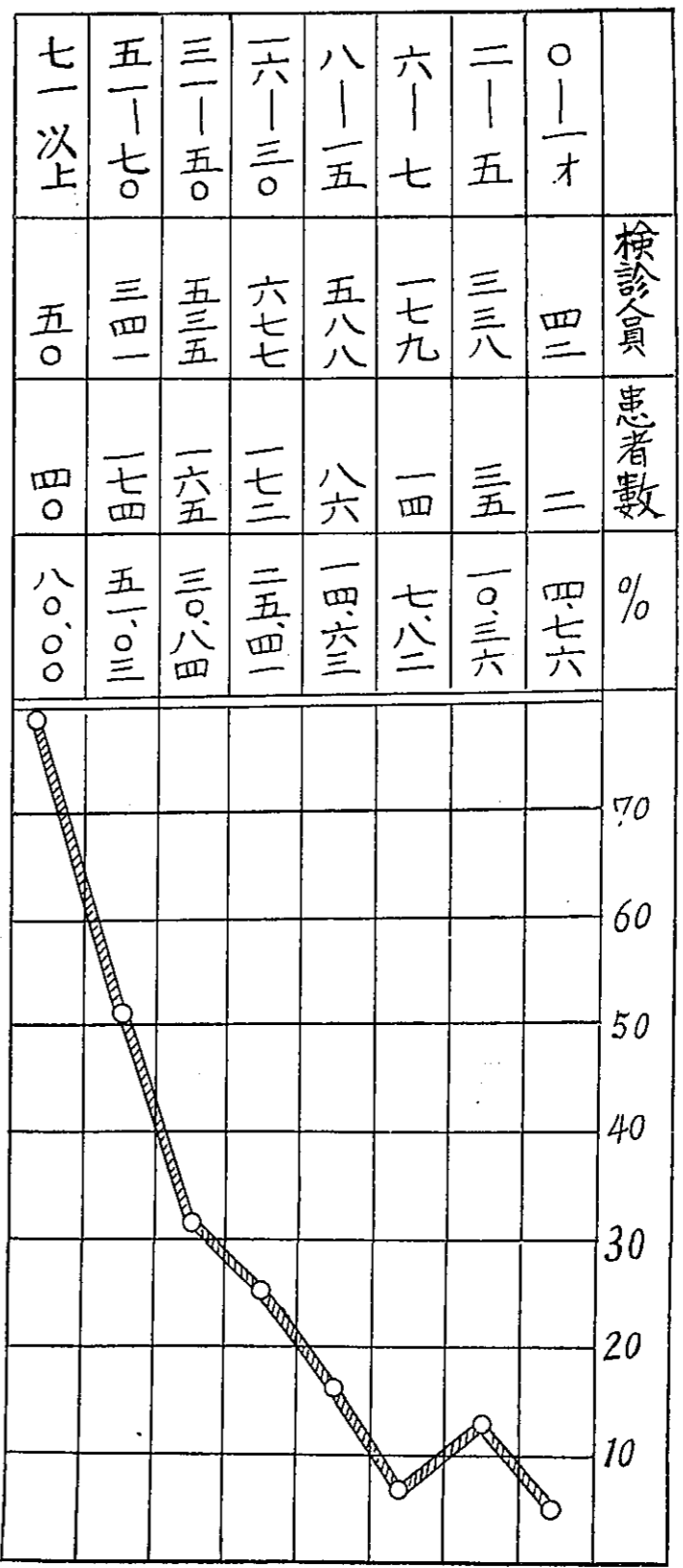
とあれども基礎となりたる數少なく且幼少時代に於ける觀察を缺けり。

大正十四年青森縣中津輕郡清水村大字下湯口の實地調査に於て検査人員六二四人中三二四人の患者に對し年齢別あり。

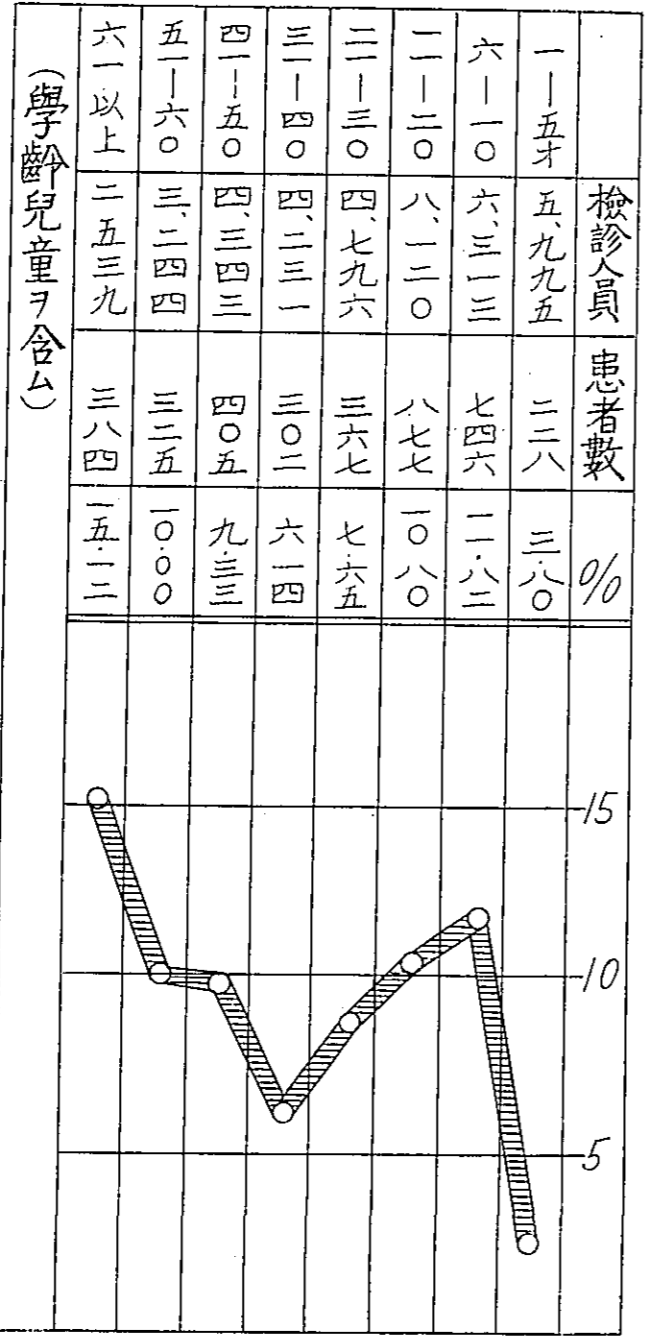
年齢	検査人員	患者数	%	検査人員	患者数	%
一歳以上—七歳迄	一〇四	四五	四三・二七	八九	二九	三二・五八
八歳以上—十四歳迄	八七	五一	五八・六一	一七三	四五	二六・〇一

年齢	検診人員	患者数	%	年齢	検診人員	患者数	%
四十一歳以上五十歳迄	七〇	一八	二五・七一	六十歳以上	四二	一六	三八・一〇
五十一歳以上六十歳迄	五九	二〇	三三・九〇		計		

即學令期に最高の山を爲し、成年期に急轉直下し老年に及び小丘を形れり。
大正十四年宮城縣長岡村に於ける基本調査の成績より見る時は



右によるときは〇―一歳最も少く年齢の増加と共に増率せるを見る。
昭和二年新潟縣に於て十二町村に對し極診人員三九、五八四人中「トラホーム」患者三、六三五人を發見したるが、之れを年齢別となす時は左の如し。



(學齡兒童ヲ含ム)

即個々の年齢に於ては多少の相違ありと雖も一歳より五歳迄の間比較的少く學齡期より急劇に増加(第一の山)し、二〇歳頃より四〇歳に掛け急減し、老齡に及ぶに従ひ更に高く、六十歳以上最高率(第二の山)を示すの點、略々宮城縣に於ける調査と一致せり。
次に全國小學兒童の「トラホーム」を見るに(大正十二年文部省)、男は七一・三歳迄一四・〇―一六・〇%を維持し、十四歳より二二・一三%に減じ、女は七一・十四歳迄持続的に一六%を示し、十五歳より初めて二二・一三%に降り、即學齡期に高きは一般民衆檢診のみならず學童のみに就き調査の結果も亦同様の成績を示せるに徴し動かさざる處なり。
尙老人に本病者高率なるは宮城及本縣に於ける大衆を基礎とせる調査成績の明示する處なるが、老人は獨り罹病率高きのみならず殊に女子に多く、且何れも陳舊、加ふるに多く合併症を伴へること後段述ぶるが如く、恰も彼の結核が老人に潜在すると同様本病蔓延の上より見るも最も危険なる状態にあり。而して斯く老人に本病高率なるは同時に患者の治療熱を缺けること及本病が悉く難治なることを如實に現はせるものと云ふべし。

尙幼時に於ける「トラホーム」に就き一言せんか、本病が一歳未満の幼弱年齢階級に感染し得ることは本縣に於ける事實亦之れを證する處なるも、さりとて慈母に抱かれて生育する間は本病少なく、漸く長じて所謂一人遊びを爲す頃に至り急劇に増率するは本縣調査に見て明なる處、殊に此の關係は入學前身體検査成績中本病罹病率の入學後罹病率と大差なきに徴し一層明瞭となるべし（入學前「トラホーム」検査成績参照）。

「トラホーム」検査成績表（廣島縣豊田郡忠海町宇二窓に於ける住民の「トラホーム」検査成績）

年齢別	被検査人員	「トラホーム」患者		被検査人員對「トラホーム」患者
		重	輕	
十歳迄	二二一	一	一	四九・三五
十一歳迄	二三五	一	一	四六・三八
十二歳迄	二〇五	一	一	五〇・二四
十三歳迄	二一八	一	一	六〇・〇九
十四歳迄	二〇五	一	一	三〇・七七
十五歳迄	二一八	一	一	三五・二九
十六歳迄	二〇五	一	一	二八・七五
十七歳迄	二一八	一	一	二二・四五
十八歳迄	二〇五	一	一	二六・四五
十九歳迄	二一八	一	一	三三・八四
二十歳迄	二〇五	一	一	三二・六五
二十一歳迄	二一八	一	一	三六・四四
二十二歳迄	二〇五	一	一	二二・四五
二十三歳迄	二一八	一	一	二二・四五
二十四歳迄	二〇五	一	一	二二・四五
二十五歳迄	二一八	一	一	二二・四五
二十六歳迄	二〇五	一	一	二二・四五
二十七歳迄	二一八	一	一	二二・四五
二十八歳迄	二〇五	一	一	二二・四五
二十九歳迄	二一八	一	一	二二・四五
三十歳迄	二〇五	一	一	二二・四五
計	一、八一四	一、八一四	一、八一四	一〇〇・〇〇

「トラホーム」患者年齢性別表（青森縣中津輕郡清木村大字下湯口）

年齢別	人員	患者		人員ニ對スル百分率
		重	輕	
七歳迄	四九	一	一	三六・七三
八歳迄	五五	一	一	四九・〇九
九歳迄	六一	一	一	一・〇〇
十歳迄	五五	一	一	二・四五
十一歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十二歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十三歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十四歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十五歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十六歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十七歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十八歳迄	四〇	一	一	二・五〇
十九歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十一歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十二歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十三歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十四歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十五歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十六歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十七歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十八歳迄	四〇	一	一	二・五〇
二十九歳迄	四〇	一	一	二・五〇
三十歳迄	四〇	一	一	二・五〇
計	六二四	三六	三六	三五・九〇

「トラホーム」基本調査並に治療成績年齢別患者歩合

宮城縣栗原郡長岡村

年齢	検査人員	患者		計	%
		重	輕		
〇歳—一歳迄	四二	一	一	二	四・七六

年齡別	檢診人員	患者數		計	%
		重	輕		
二歲以上五歲迄	三三八	二	一	三五	一〇・三六
六歲以上七歲迄	一七九	三	四	一四	七・八二
八歲以上十五歲迄	五八八	九	八	一七	二五・六三
十六歲以上三十歲迄	六七七	七	九	一六	二四・四一
三十一歲以上五十歲迄	五三五	九	一	一〇	一四・六三
五十一歲以上七十歲迄	三四一	七	九	一六	二五・四一
七十一歲以上	五〇	一	七	八	一〇・〇〇
合計	二、六五〇	五・二五%	九・四〇%	一、二九九	八〇・〇〇

年齡別「トラホーム」檢診成績表 (昭和二年新潟縣) (其二)

年齡別	檢診人員	患者數	比百分	農		漁		計	
				檢診人員	患者數	比百分	檢診人員	患者數	檢診人員
五歲迄	六四	一七	二・四五	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
十六歲以上	一、三三	四	〇・三〇	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
二十一歲以上	七〇	四	五・五七	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
二十一歲以上	一、四三	九	六・二九	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
三十一歲以上	一、〇〇	五	五・〇〇	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
合計	三、〇〇	三〇	一〇・〇〇	三、〇〇	三〇	三、〇〇	三〇	三〇	三、〇〇

年齡別「トラホーム」檢診成績表 (昭和二年新潟縣) (其一)

年齡別	檢診人員	患者數	比百分	農		漁		計	
				檢診人員	患者數	比百分	檢診人員	患者數	檢診人員
三十一歲以上	四〇	三	七・五〇	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
四十一歲以上	四〇	二	五・〇〇	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
五十一歲以上	三三	三	九・〇九	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
六十一歲以上	二五	五	二〇・〇〇	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
合計	一三二	一三	九・八五	一三二	一三	一三二	一三	一三	一三二

年齡別「トラホーム」檢診成績表 (昭和二年新潟縣) (其二)

年齡別	檢診人員	患者數	比百分	農		漁		計	
				檢診人員	患者數	比百分	檢診人員	患者數	檢診人員
五歲迄	一、二七	四	三・一五	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
十六歲以上	一、三三	八	六・〇一	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
二十一歲以上	一、〇〇	五	五・〇〇	一、〇三	一	一、〇三	一	一	一、〇三
合計	三、六〇	一七	四・七二	三、〇〇	一七	三、〇〇	一七	一七	三、〇〇

年齢別	町		村		合計	
	人員	患者数	人員	患者数	人員	患者数
	割合	割合	割合	割合	割合	割合
三十一歳以上	1,200	120	1,100	110	2,300	230
二十歳以上	1,100	110	1,000	100	2,100	210
四十歳以上	1,000	100	900	90	1,900	190
三十一歳以上	900	90	800	80	1,700	170
二十歳以上	800	80	700	70	1,500	150
四十歳以上	700	70	600	60	1,300	130
三十一歳以上	600	60	500	50	1,100	110
二十歳以上	500	50	400	40	900	90
四十歳以上	400	40	300	30	700	70
三十一歳以上	300	30	200	20	500	50
二十歳以上	200	20	100	10	300	30
四十歳以上	100	10	50	5	150	15
合計	7,000	700	6,500	650	13,500	1,350

第六節 文化普及と「トラホーム」

文化の普及及伸展が正に國民の衛生生活を誘致刺戟し、延ひては「トラホーム」の如き非衛生的日常生活者又は國土に多き疾病を驅逐するに足ることは、世界各地に於ける事實の有力に物語る處なり。我國に於ける事情又然り。明治中葉の頃我國に於ける本病は一般住民及學校に於ては概計三〇%、軍隊に於てすら一八〇%内外の高率を示せるもの、爾來文化の急速なる發達普及と併行し、最も慶賀すべき遞減をなし、現在にありては當時の三分の一内外に下れるが如き争ふべからざる證左と云ふべし。此れ蓋し一般文化殊に教育の普及、交通機關の發

達等に負ふ處大なるや論なしと雖も、然も亦衛生教育普及の度を強め來りたる結果たらずんばあらず。今聊か數字に依つて此れを見んか

第一、學校教育普及と「トラホーム」

種類	明治四十二年		大正十二年	
	患者数	「トラホーム」患者%	患者数	「トラホーム」患者%
全國小學校卒業生	708,702	23.43(四十二年)	1,668,777	15.71
全國高等女學校卒業生	11,400	15.54(同)	48,885	7.10
全國中學校卒業生	16,165	14.49(同)	28,825	6.22
全國實業學校卒業生	1,323	17.09(同)	2,768	7.78
全國專門學校卒業生	4,311	5.97(大正四年)	8,090	2.20
全國直轄學校卒業生	3,242	2.75(同)	6,413	3.23

備考 全國人口は 明治四十二年 五〇,二五四,四七一(尙詳細添付卒業生年消長表参照) 大正十二年 六〇,二五七,九三一人

即就學乃至入學數の著しく増加するに伴れ本病罹患率も亦減少すること一目瞭然たり。尙此の點に關し本縣の事情を調査するに、明治四十年以來三市小學校卒業生歩合の増加に伴ひ本病患者の漸次減少すること次表の如く(尙添付孤線表参照)、此れを以て單に國民教育普及の效果にのみ歸すべからざるや勿論なるも、亦以て重大なる一因子たるを失はざるべし。

小學兒童卒業歩合と「トラホーム」

年別	新 潟 市		長 岡 市		高 岡 市		計	
	就學歩合	卒業歩合	就學歩合	卒業歩合	就學歩合	卒業歩合	就學歩合	卒業歩合
明治四十年	94.6	94.9	93.7	93.3	93.3	93.3	93.3	93.3
同四十二年	94.8	94.8	93.8	93.8	93.3	93.3	93.3	93.3

年 別	新 潟 市		長 岡 市		高 田 市		計	
	就学	卒業歩合	就学	卒業歩合	就学	卒業歩合	就学	卒業歩合
明治四十二年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
明治四十三年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
明治四十四年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
明治四十五年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
大正二年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 三 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 四 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 五 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 六 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 七 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 八 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 九 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 十 年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一
同 十一年	九・三三	一四・七	九・八	一四・三	九・七	一四・二	九・三	一四・一

一五六

又小學校より漸次上級學校に及ぶに従ひ罹病率劇減せるは、他の原因の添加勿論是れあるべきも、小學校時代に於ては非衛生的非文化的な生活家庭より出發する多數兒童を包容するも、中等學校以上に在りては文化的乃至衛生的な生活家庭より出發する子弟、換言すれば衛生的に幾分たりとも洗練されたる家庭の子女多數を占むるが爲ならずんばあらず。本縣に於ける實情又此れを證せり（學校の部、學校種類別「トラホーム」表参照）。

第二、都鄙の關係と「トラホーム」

都鄙に依り住民の知識程度、従つて生活状態を異にする關係上、「トラホーム」の濃度並に輕重に自ら異動あるべきは一般に豫想せらるゝところなり。Hirschbergも皆て學校に於ける本病の検査に際し、

高等學校	一〇〇%
市の學校	一五〇%
田舎の學校	四七〇%

なりしを報じ、其他一般に市街地に少なく、田舎に多きは分布並に消長の部に屢々散見せる處なり。以下本縣に於て調査せる事項に就き觀察を試みんとす。

各府縣に於ける接客業者、壯丁及其他等の「トラホーム」検査成績を基礎とし、市部、町部を都とし、山地、平地、海岸の村を鄙となし、最近三年間平均を以て其罹病状況を比較するに、三種検査成績の何れより見るも都に少なく、鄙に多きこと先づ次の如し。

其他の「トラホ」
ムシ検査% 11.34
都 11.34
部 17.29
次の本縣下の實情に照すも亦全國と略同様の成績を示せり。

壯丁「トラホーム」豫
備検査% (三市を都とし
全村落を部とす) 9.09
都 9.09
部 11.38

余住民検査%
(町部を都とし
村落を部とす) 11.95
都 11.95
部 12.37

學校児童検査%
(三市を都とし全
村落を部とす) 10.71
都 10.71
部 15.07

以上統計的數字は都會地及準都會地に本病比較的少なく、村落に多きことを如實に表はすものなり。乍然元より之れ大量觀察にして更に仔細に觀察すれば、都必ずしも本病少なからず、部必ずしも多からざる場合決して、尠なしとせず、蓋し都と云ひ部と云ふ窮極する處、其住民中非衛生的生活者の多數を包含するや否やに依つて、自ら本病の多寡相較るべきを以てなり、例へば彼のニューヨークの如き世界的文化都市に於てすら、避難所の救護民には40%の「トラホーム」あるが如き、又能く其の間の消息を物語るものならんか。

第三、交通機關の發達と「トラホーム」

更に交通機關の普及は、時に依つて無病地帯に傳染病を播種する場合なしとせざるも、大體に於て文化生活を助成すること國家の現狀に徴し明なるが、本縣下にも此れに關する、顯著なる一事例あり。即弊越西線の開通は大正二年の事なるが、從來邊境の地且濃厚なる「トラホーム」病竈地帯なりしもの、本線開通後漸次同地方の開け行くに伴ひ次の如く。

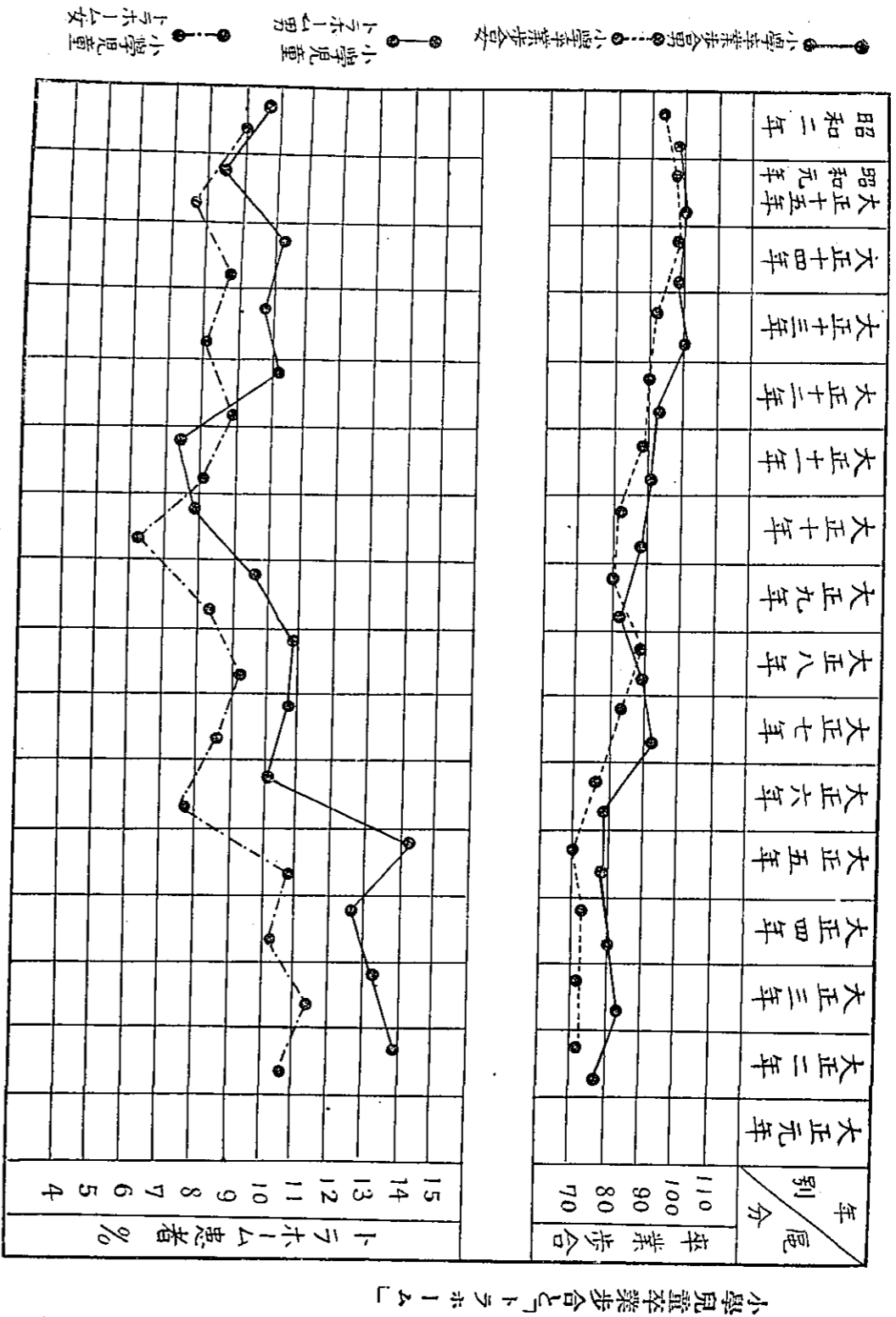
村	大正六年壯丁豫備検査患者%	同十五年患者%
松	16.21	5.56
五	18.83	3.57
新	28.57	5.56
關	31.03	5.56
東	35.71	3.45
菅		
名		
村		

最も顯著なる減數を示せるが如き是れなり。

各種學校入學及卒業者累年消長 (教育普及狀況調査の内) (文部省統計)

年	小學校		中學校		女學校		實業學校		專門學校		直轄學校	
	入學者	卒業者	入學者	卒業者	入學者	卒業者	入學者	卒業者	入學者	卒業者	入學者	卒業者
明治四十二年	4,686	4,686	1,852	1,852	1,852	1,852	1,852	1,852	1,852	1,852	1,852	1,852
同四十三年	5,476	5,476	2,176	2,176	2,176	2,176	2,176	2,176	2,176	2,176	2,176	2,176
同四十四年	5,530	5,530	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
明治四十五年	5,777	5,777	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300
大正元年	6,000	6,000	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400
大正二年	6,400	6,400	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500
同三年	6,700	6,700	2,600	2,600	2,600	2,600	2,600	2,600	2,600	2,600	2,600	2,600
同四年	7,000	7,000	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700
同五年	7,300	7,300	2,800	2,800	2,800	2,800	2,800	2,800	2,800	2,800	2,800	2,800
同六年	7,600	7,600	2,900	2,900	2,900	2,900	2,900	2,900	2,900	2,900	2,900	2,900
同七年	7,900	7,900	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
同八年	8,200	8,200	3,100	3,100	3,100	3,100	3,100	3,100	3,100	3,100	3,100	3,100
同九年	8,500	8,500	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200
同十年	8,800	8,800	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300
同十一年	9,100	9,100	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400
同十二年	9,400	9,400	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500

備考 中學校及女學校は公立、私立のみ。
專門學校の内公立、私立は明治四十二年同三年入學志願者數なし。
直轄學校の大正十二年は大學及高等學校を除く。



第七節 水の使用状況と「トヲホーム」

第一 水を充分使用し得る地と然らざる地との比較

オーストリア、クラインの「トヲホーム」流行原因の一つとして水を充分使用し得ざるが爲なりとの記載あり。蓋し何人も考へ得る處なるべく吾等も亦之れに關し調査を試みたり。而して調査の目標としては井水、河川水、溝渠水等水源、水質の如何を問はず洗面、洗身、洗手、洗濯等に惜氣なく、水を充分使用し得る状態にあり、且實際使用しつつある地を「充分使用し得る地方」、全然之れに反する地を「充分使用し得ざる地」として調査したり。

尤も調査の根據となるべき數字は成るべく多數を得んが爲め、先づ以て既往三年間各方面に亘り施行したる成績を基礎として縣下各地に就き比較的水の使用自由なる地と然らざる地に就き觀察を試みたり。其成績次の如し。

水の使用状況と「トヲホーム」患者の多寡

	徴兵検査成績		小學校兒童検査成績		一般住民検査成績	
	検査人員	患者%	検査人員	患者%	検査人員	患者%
水ヲ充分使用シ得ル地	五二、六四四	八・〇六	五二八、六五八	一・四八	一五一、四三九	一一・二八
水ヲ充分使用シ得ザル地	二、六一四	一一・九〇	二九、〇八九	一三・三七	二六、六六二	一七・五〇
	大正十四年、十五年、昭和二年 既往三年平均		同		最近	検査

前表に依れば壯丁豫備検査成績に徴するも、小學生並一般住民検査成績に依るも、顯著の差こそあれ、何れを見ても水を充分使用し得る地方は低率なるの傾向を表はし居れり。

茲に於て更に此の事實を一層明確にすべく、縣下各地の内、水を使用すること充分なる地と、不充分なる地との、代表的町村のみに就き、再調査を試みたる成績は如次表。

水を充分使用し得る地と否らざる地との「トラホーム」罹病率

充分使用シ得ル地	充分使用シ得サル地	検査人員		患者数	%
		検査人員	患者		
赤谷村	見附町	一、八一七	九四二	二四	一、三三
西神納村	大代村	九一四	五〇二	四三	二、三八四
浦濱村	柿崎村	六六六	三八三	二八	二、〇〇二
川東村	計	五、〇六一	四五二	二八	二、〇八六
計		八、四五八	二、二七九	三三〇	一、六九二

要するに水を惜気も無く使用し得る地方に於ては(其水質の如何に拘らず)本病少なきこと数字の示す處の如し。

新潟縣壯丁「トラホーム」豫備検査成績表

(最近三年平均より見たる水と「トラホーム」)

性別	水ヲ充分使用シ得ル地		水ヲ充分使用シ得サル地	
	検査人員	患者	検査人員	患者
海岸の市	八・七九	二、三〇八	一〇・三二	一、一五〇
平地の市	六・八二	二、三一五	一三・八四	一、〇九一
海岸の町	一一・五四	一、四一〇	一七・九六	一、〇九一
海岸の村	一三・〇七	七四二	一八・七五	一、〇九一
平地の町	九・三八	六六八	一四・三七	一、〇九一
平均	八・三八	一、三三二	一〇・五六	一、〇九一

新潟縣小學兒童「トラホーム」検査成績表

性別	水ヲ充分使用シ得ル地		水ヲ充分使用シ得サル地	
	検査人員	患者	検査人員	患者
海岸の市	一七、二四一	二、三〇八	一三、三九	一、〇九一
平地の市	一六、一六八	二、三一五	一四、三二	一、〇九一
海岸の町	一一、〇五三	一、四一〇	一七、九六	一、〇九一
海岸の村	一一、〇五三	七四二	一八、七五	一、〇九一
平地の町	二二、九〇六	六六八	一四、三七	一、〇九一
平均	一〇、八五三	一、三三二	一〇、五六	一、〇九一

合計	山地ノ村		山地ノ町		平地ノ村		平地ノ町		海岸ノ村		海岸ノ町		平地ノ市		海岸ノ市	
	計	男女	計	男女	計	男女	計	男女	計	男女	計	男女	計	男女	計	男女
二八〇、六五七	二四八、〇〇一	五二八、六五八	一一、五二〇	一〇、四八六	一一、五二〇	一〇、四八六	一一、五二〇	一〇、四八六	一一、五二〇	一〇、四八六	一一、五二〇	一〇、四八六	一一、五二〇	一〇、四八六	一一、五二〇	一〇、四八六
三〇、五六二	三〇、一〇三	六〇、六六五	一、五二〇	一、四八六	一、五二〇	一、四八六	一、五二〇	一、四八六	一、五二〇	一、四八六	一、五二〇	一、四八六	一、五二〇	一、四八六	一、五二〇	一、四八六
一〇、八九	一〇、一〇三	一、四八八	九、八六	九、三八	九、八六	九、三八	九、八六	九、三八	九、八六	九、三八	九、八六	九、三八	九、八六	九、三八	九、八六	九、三八
三市	四十町	十五村	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町	七町
一五、六二八	一三、四六一	二九、〇八九	三、二三四	二、九二〇	三、二三四	二、九二〇	三、二三四	二、九二〇	三、二三四	二、九二〇	三、二三四	二、九二〇	三、二三四	二、九二〇	三、二三四	二、九二〇
一、九七七	一、八八四	三、八六一	二、四八	二、三〇	二、四八	二、三〇	二、四八	二、三〇	二、四八	二、三〇	二、四八	二、三〇	二、四八	二、三〇	二、四八	二、三〇
一、二六五	一、四〇〇	一、三二七	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二
三町	十六村	五村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村	四村

新潟縣自大正五年町村全住民檢診成績表

合計	海 岸 町	同 平 地 町	同 山 地 町	同 村 村	水ノ充分ナル地		水ノ不充分ナル地	
					市町村	檢診人口	市町村	檢診人口
合計	一	六	五	二	六、六六六	九〇〇	一、三五〇	一、八四三
同 海 岸 町	一	六	五	二	一三、七九〇	二、五四一	一八、四三三	二、一〇六
同 平 地 町	二	六	五	二	二二、九一七	二、八七一	一、二〇〇	七、二七三
同 山 地 町	二	六	五	二	七〇、八一六	九、一八七	一、二九九七	一四、三七九
同 村 村	一	二	一	一	二、七一九	一三五	四、九七	二、九七二
合計	五一	一五一	四三九	一八、五九四	一一二二八	七	二六、六六二	四、六六七
市町村	二	一	一	一	三三、五三一	二、九六〇	八、八三	二五一
檢診人口	一、八四三	九〇〇	一、三五〇	一、八四三	二、一〇六	五〇二	二、三、八四	二、三、八四
患者數	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七
百分比	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七

第二井 戸

水の使用状況を知る一助として、檢診を施行したる地に就き、井戸の普及状態調査を行ひたり。其結果は左表の如く、個人井を有する者は却て患者多き成績を得たり。尤も本縣は山地を除けば到る處水質悪く、井戸を有するも夏季全く使用し能はざるもの、又は年を通じて單に用水としてのみ價值あるもの、若くは水量極めて少なく充分に使用し得ざる爲、各地共簡易水道を布設する等水多き國にして水に不自由を感じつゝある状況なるを以て、右の結果を以て直ちに批判の資料に供せんとするものにあらず只一参考資料として調査したるに過ぎず。

井戸と「トラホーム」 (其一)

(昭和二年新潟縣)

井 有	山 地		平 地		海 岸		計	
	人員	患者數	人員	患者數	人員	患者數	人員	患者數
計	四、四七〇	三、一〇〇	三、一〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇
女	二、二三五	一、五七〇	一、五七〇	五七〇	五七〇	五七〇	五七〇	五七〇
男	二、二三五	一、五三〇	一、五三〇	五三〇	五三〇	五三〇	五三〇	五三〇
百分比	五〇	四八	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

計	井 有		井 無		計	
	人員	患者數	人員	患者數	人員	患者數
計	八、〇八六	四、四七〇	三、九六六	一、九六六	四、一二〇	二、五〇四
女	四、一三三	二、六八三	二、〇七三	一、〇七三	二、〇六〇	一、〇一〇
男	三、九五三	一、七八七	一、八九三	〇、八九三	二、〇六〇	一、四九四
百分比	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

井戸と「トラホーム」 (其二)

戸 有	町		部		村		計	
	人員	患者數	人員	患者數	人員	患者數	人員	患者數
計	三、四〇七	三、四〇七	三、四〇七	三、四〇七	三、四〇七	三、四〇七	三、四〇七	三、四〇七
女	一、七〇三	一、七〇三	一、七〇三	一、七〇三	一、七〇三	一、七〇三	一、七〇三	一、七〇三
男	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四
百分比	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

第三 洗面用水

之れ又水に關する調査の一部なるが、縣下の状況を見るに、地方によりては極めて少量の水を以て洗面する慣習多く、殊に水少なき地方に於て然り。尙甚しきに至りては一箇の洗面器に盛りたる少量の水を家族數人使用するが如き亦決して稀らしからず。(風俗習慣参照)
右様の状況なるを以て人家附近に河川溝渠ある地方に於ては清濁に拘らず之を使用するもの少なからず。今洗面用水を井水、河川水に分ちて調査したる成績に就て見るに河川水を用ひて洗面するものは井水に依るものより「トラホーム」罹患率低き結果を得たり、即別表の如し。

計	町		部		農		村		漁		村		計	
	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數
計	七、〇〇八	一、五〇三	九三・六	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇
男	八、四三三	一、五〇三	三三・七	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇
女	一、五七五	一、〇〇〇	二二・三	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇

井水使用者%	山		地		平		地		海		岸		計	
	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數	比百分	人檢	患者數
六・九五	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇
三・〇〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇

即山地たると平地たると將た海岸たるとを問はず、何れも河川水使用者は著しく低率を示せり。勿論之れのみによつて本病多寡の因由を解決し得べからざるや論なしと雖も、井水使用者は前述の如く水量の節約を餘儀なくされ又は無性若くは衛生的無理解等より極少量を以て甘んずる風あるも、河川水に至りては其水質の如何、乃至消化器系傳染病毒の有無に拘らず其量に制限なく、勿論洗面器等を用ゆるの煩なく、同時に共用の危険なきによるるべし。

洗面用水の種類と「トラホーム」

山	地	平	地	海	岸	計	
						人檢	患者數
一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇

洗面用水	井		河川		計	
	女	男	女	男	女	男
計	三、九三三	一、三三三	二、九三三	一、三三三	三、九三三	一、三三三
計	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇	一、〇六〇

備考 町 出雲崎、津川
村 赤谷、川東、浦濱、中通、石津、上杉、小林、太田

